

# 第90号

2011.7.11

社会福祉法人 いわき福音協会

福島整肢療護園

〒970-8001

福島県いわき市平上平塙字

古館1番地の2

TEL.0246-25-8131

FAX.0246-22-1259

<http://www.ryogoen.jp/>

E-mail.info@ryogoen.jp

# ひかりの丘

## りょうげん園は 元気です!



「6月中旬 第3病棟のみなさんの様子  
（第3病棟前庭外訓練場にて）」

### 東日本大震災に関連するご支援への御礼

去る3月11日午後2時46分頃に発生しました「東日本大震災」は、岩手、宮城、福島の3県を中心とした広範囲に渡り、甚大な被害をもたらしました。

当園が位置する福島県いわき市も、沿岸部を津波が襲い多くの尊い命が奪われる結果となり、いまだに行方が分からぬ方も多いです。

幸い内陸部に位置する当園は、建物等に致命的な被害を受ける事はなく、施設利用児(者)にも健康被害等はございませんでした。まさに不幸中の幸いでした。

震災後より、厚労省・地元自治体や取引業者の皆様、全国各地の肢体不自由児施設、重症心身障害児施設及び関連団体の皆様等々、多くの関係各位より多大なるご支援をいただきました。ここに謹んで御礼を申し上げます。

また、福島第1原発事故発生後、当園児童の一時避難でお世話になりました、心身障害児総合医療療育センター様はじめとする、東日本各地の肢体不自由児施設・重症心身障害児施設様には、絶大なるご支援・ご協力を賜りました。改めて深く感謝を申し上げます。

原発事故の終息につきましては遙か長い道程になりますが、ここ福島の地で「療育の灯り」を消す事なく、職員一丸となってこれからも努力して参りますので、今後共ご支援くださるようよろしくお願い申し上げます。

福島整肢療護園職員一同

### 目次

- 東日本大震災に関連するご支援への御礼 — 1 HAPPY通信「関係施設への避難」 — 5
- 東日本大震災りょうご園の動き — 2・3 「スカイプでつながる交流」 — 5
- 「園長就任のご挨拶」園長 渡邊信雄 — 4 「私の避難話」看護師 出羽信芳 — 6
- 環境放射線量測定値結果 — 6



## 震災先生!その時病棟は…!?

3月11日大震災の時、お子さん達は入浴の途中でした。波のように激しく揺れ動く湯船、天井が崩れてくるのではないかという恐怖の中、すぐ屋外避難できるようにしました。幸いにも寒空の下での避難はなく、お子さん・職員とも怪我はありませんでした。

原発事故でエアコンが使用できなくなり、夜間は支援物資の毛布・衣類・電気ストーブで保温して、ホッカイロを身につけながらの勤務でした。また、物流ストップにより酸素の供給困難が生じ重症のお子さんが他の施設へ避難となり、自宅へ避難するお子さん達は途中まで移送し保護者へと送り届けました。このような状況が続く中、ガソリン不足のため通勤できなくなったり、職員は館内に泊り込み、休みの職員が食料を貰い出しに行ったり、休日返上で食事介助やおむつ交換の応援をしてくれました。

お子さん達と職員が体調を崩すことなく、危機的状況を乗り越えることができたのは、“お互いを思いやる心”と“団結力”だと思います。

避難の様子(3/22)



12名が避難。保護者の方や学校の先生も駆けつけました。

## リハビリスタッフのサポート

リハビリスタッフは震災以降、朝食介助から夕食後のオムツ交換まで、病棟スタッフとともに行いました。

また、エアコンの使用を中止した病棟は、低体温のお子さんが続出するほどの寒さだったので、日中に暖をとり、体を動かし活動出来る場所として、希望館(リハビリ棟)PT室を使用しました。お子さんが自由に動いても危険がないような模様替えや、活動性を上げるような声掛けや遊び、必要に応じて個別リハを行いました。布団に必死にくるまりながら寒さに震えていたお子さん達が、徐々に表情も穏やかになり、玩具やスタッフに向かって動く様子に安心しました。



## 肢体不自由児病棟再開

5月13～避難していた子ども達がりょうご園に戻ってきました。



★ ★ ★ ★ ★ ★

お別れ前に  
静岡医療福祉センターの  
皆さんとの記念ショット(5/30)



### ●園長就任のご挨拶

團長 渡邊信雄



このたび平成二十三年四月一日付けで福島整肢療護園園長に就任し、併せていわき福音協会理事、評議員をも拝命致しました。

去る三月十一日の東日本大震災による大地震、大津波さらには東京電力福島第一原子力発電所事故による放射能汚染という世界に例のない大災害の混乱の中、昭和四十五年に東北大医学部卒業と同時に入職し四十一年間勤務したいわき市立総合磐城共立病院小児科を三月三十一日で定年退職し、福島整肢療護園で第二の人生歩むことになりました。磐城共立病院勤務中は平成元年から小児科主任として勤務し、いわき市医師会理事、日本医師会乳幼児保健検討委員会委員、日本小児科学会評議員、代議員、福島県小児科医会会长、磐城共立高等看護学院長などを含めて多くの公職、役職を経験させていただきました。

小児科医としてはアレルギー疾患を専門とし、いわき市医師会の公衆衛生、小児保健相談理事としては乳幼児健診、予防接種、児童虐待対策などをいわき市の担当部署などと協力して進めてきました。福島整肢療護園の仕事は、嘗て短期間お手伝いしたことがあるとはいえ、私にとっては新しい領域であり、就任以来三ヶ月経ちましたが研修医の心境で勉強させていただいているところです。就任当日から、いわき福音協会及び福島整肢療護園の皆様には温かく迎えていただき、海野洋理事長及び岡部明氏からは、開設者であられる大河内一郎先生著「光の丘の子どもたち」、大河内一郎先生追悼記念「ただ障害児の友として」、「いわき福音協会創立50周年記念誌」「日光留存草己」、海野洋著「施設からの叫び、希望と夢を託して」、大河内一郎先生資料集などを贈りいただきました。ご存知通り、福島整肢療護園は整形外科医で、若くしてキリスト教の信仰に入られた大河内一郎先生が軍医として太平洋戦争に従軍され、復員後昭和二十七年に設置された東北、北海道で最初の肢体不自由多くの支援を受けながら昭和二十五年に母体であるいわき福音協会を設立され

「児の療育施設であります。『肢体不自由』という言葉は肢体不自由児療育の父と呼ばねてゐる東京大学整形外科教授である高木憲次先生によつて命名されました。先生は昭和十七年に日本最初の肢体不自由児施設『整肢療護園』を東京に開設され、今は『心身障害児総合医療教育センター』に発展し、日本の心身障害児療育をリードし続けています。

しなければならない  
　大河内先生も同じ理念を持たれ、聖書的信仰に支えられながら多くの困難に耐え機関車の如くに福島整肢療護園を設立発展させ、さらに子どもたちなどの映画を製作されて国内外に療育施設の必要性を説かれました。“誰も行かない道、棘の道と棘の道は我行くべき道はなければ、この道を行く”「地の塩たれ」と書き残されています。肢体不自由児のみでなく重症心身障害児療育をも始められ、さらにいわき福音協会として多くの障害者の福祉施設をも併設され今日に至っています。聖書的信仰に基づいての運営は、今も毎日の朝会での讃美歌、聖書朗読、黙祷に象徴されれていると思います。私はクリスチヤンではあります。若き心に「地の塩、世の光」の精神を学ばせていただき團結力と連携で結ばれており感謝しています。

私が就任する前の大震災発  
災直後には、福島県総合医療  
センターをはじめ、心身障害者  
児総合医療センター、神  
奈川県立ことども医療センター、  
静岡医療福祉センター、信濃  
医療福祉センター、山梨県立  
あけぼの医療福祉センター、  
群馬整肢療護園、両毛整肢療  
護園、なす療育園に18歳未満  
の入所児を中心的に直ちに避  
難させていただき、約3ヶ月  
間お世話をいただきました。さ  
らに、日本肢体不自由児施設  
運営協議会はじめ多くの団体  
地元の団体、個人からも多大な  
の義捐金、物資のご支援を戴  
きました。原発事故による核  
射能汚染問題は続いているま  
すが、避難させていただいた  
いる子供達も復園させ始め  
ることが出来、今月で園として  
の避難体制を一時解除す  
ることとしました。この場を  
お借りして、ご支援いただき  
ました皆様に心から敬意と  
感謝の意を表し上げます。

**厚生労働省・全国肢体不自由児施設運営協議会・日本重症児福祉協会  
全国重症心身障害児(者)を守る会のご支援をいただき、震災後の危機的な  
状況から子どもたちが避難できました。**

避難時には各施設が燃料不足、放射能等の心配がある中、震災直後の荒れた高速道路を走り遠方より支援物資を携え、避難する子どもたちを非常事態のいわきへ迎えにきて下さいました。感謝を込めて避難を受入れて下さった肢体不自由児施設・重症心身障害児施設をご紹介します。



# Happy通信

## スカイプでつながる交流

### 「子ども達を他県の施設に避難させる。」

その決断によって、余震、断水、原発、様々な問題から子ども達を遠ざけられる安堵と、十分な準備もないまま慣れない環境へ子ども達を送り出す不安の、相反する気持ちが湧き上りました。

### 「避難中も子ども達に安心してもらいたい。」

そのためには何ができるかを考え、私たちはスカイプを利用する事にしました。スカイプとはインターネット回線を利用し、テレビ電話ができるアプリケーションです。スカイプの環境整備や通信担当職員のスケジュール調整など、準備は決して簡単な事ではありませんが、避難先となった多くの施設の方々も、「子ども達のために」と協力して下さいました。普通の電話ではお話し出来ない子ども達でも、パソコン画面に映る表情や仕草を通して療護園の職員とコミュニケーションがとれ、遠く離れていても子ども達と歌ったり笑ったり、つながりを作ることができました。子ども達を安心させる為に始めたスカイプでしたが、療護園の職員もまた、元気そうな子ども達の声や姿に励まされ勇気づけられました。

お忙しい中ご協力頂いた各施設の皆様ありがとうございました。



りょうご園に帰ってきた子ども達の笑顔からも各施設や隣接する特別支援学校で温かく対応頂いたことを職員一同実感しております。また、現状では避難には至りませんでしたが、緊急事態に備えいわきでの生活を継続していた重症者の受け入れや一時避難を承諾下さった多くの重症心身障害児施設(関東近郊10施設)があります。

みなさま本当にありがとうございました。  
紙面を通じてお礼申し上げます。

# 『私の避難話』

2011年3月11日、今までに体験した事のないM9.0と言う大地震とそれによる大津波によって未曾有の被害をもたらせた『東日本大震災！』。

我が家前の道路は電車にふさがれ車を動かすことが出来ず、原発の水素爆発も重なり、避難を余儀なくされた。

私と妻は医療従事者なので、それぞれの施設に泊まり込みの勤務となり、家族バラバラの避難生活が始まった。

園全体でも震災当日から副園長や診療部長・事務長・総師長を始め、十数名の職員が状況を見守る為に泊まっていた。私は病棟の一角を借り、「初めての一人暮らしを楽しもう」と甘い考えで避難生活に入ったが、昼夜を問わず続く余震と復旧しないライフラインが私に現状をさまざまと見せつけた。

限られた園の備蓄の中での食事や水分、井戸水は出るが自粛しなければならない為、何日も続く清拭だけの衛生状態。まさに谷底に突き落とされた感じだった。他の職員達にも笑顔は見られず、その状況が子ども達にも伝わり、園全体が暗い雰囲気の生活が数日も過ぎた。しかし肢体不自由児協会や他施設、一般企業からの支援物資が続々届くようになり、徐々に職員達や子ども達に笑顔が戻って来た。

また私にも病棟職員達が気を使ってくれ、物がなく自分達の生活も厳しい状態にも拘わらず、様々な食料を調達したり、手料理を作ってくれたりして支えてくれた。私は職員の優しさと気配りに嬉しくなり、この職員達に巡り会えた事に感謝した。

病棟は外泊をしていた子どもはそのまま自宅待機となり、残った子どもは半分くらいだったが、他県に避難した職員もいた為に、残った職員で夜勤を含め勤務をこ



看護師 出羽信芳

震災後りようご園に泊まり込んでいたときはヒゲも剃れませんでした…。

なさなければならなかった。毎日数十回にも及ぶ余震に子ども達は恐怖で泣きながら職員にすがり、その職員達も震災で家族を亡くした人、自宅を流された人、家族を避難させ自分だけ残った人、避難したくてもできない人、不安で泣き出したいのを我慢している人。様々な状況の中で、様々な想いを職員はもっていた。それでも子ども達の笑顔の為、その笑顔を絶やさない為にギリギリの状態で、みんな頑張って勤務をしていた。

しかし原発問題は続いている為に、子ども達は退院もしくは他施設に転院する事になり、病棟は閉鎖。他の病棟と統合になり、職員は慣れない環境での慣れない仕事に心身ともにグラついていた。私もその日その日を乗り切るのが精一杯で、他のスタッフに声をかける余裕もなかった。

勤務を終えて、病棟に戻っても人の気配がなく、淋しさと不気味なほどの静けさと肌寒さ、そして終わる事のない余震への不安しか感じられなかった。テレビを見て気を紛らわそうとしても、震災関係のニュースと同じコマーシャルしか放映されずに、不安とストレスが増すだけの生活が約1ヶ月間続いた。

今は我が家に家族全員が戻ってきて、町も津波で崩壊した家屋の廃材は片付けられ、震災当時に比べ少しづつだが、以前の状態に戻りつつある。

時折リテレビで流れる震災時のコマーシャルを見ると、たった2カ月前の出来事なのに、ずぅーっと前の過去の出来事のような感じがした。直接的な被害を受けていない私は、周囲が復興し始め、今回の震災の記憶も薄れるかもしれない。もう一度今回震災がもたらした事実を受け止め、人との「絆」を大切にし、前を向いて一步歩んでいきたいと思う。

## 環境放射線量測定値結果

りょうご園でも福島県災害対策本部による環境放射線モニタリングが4/29(金)と6/13(月)に行われました。

また、関係業者さん的好意により放射線測定器(SW83A RADIATION MONITOR中国製)をお借りし、りょうご園でも独自に職員が6/27(月)に園内各所を測定しました。



りょうご園での環境放射線量測定の様子

	測定日	測定場所	測定値
県測定結果	4/29(金)	正面玄関前	0.24 $\mu$ Sv/h
	6/13(月)	屋外訓練場	0.24 $\mu$ Sv/h
園独自測定結果 (参考値)	6/27(月)	屋外	平均 0.13 $\mu$ Sv/h
		屋内	平均 0.09 $\mu$ Sv/h

(いずれも地表からの高さ50cmで計測した数値)

## 編 集 後 記

震災発生後の3月中旬からの約3ヶ月の間、子ども達のいない第1病棟は明かりもなく…、その静けさがまさに非日常であることを物語っていました。

6月13日から子ども達が徐々に帰ってきました。病棟にも明かりが灯り、聞き慣れた子ども達の声や電動車椅子のモーター



《再開した第1病棟の登校風景》

音が耳に心地よく響きます。職員の顔も自然と笑顔に。やはり子ども達あっての我々だということを改めて実感している今日この頃です。(時)